ロシアにおける教育現場について

前在ロシア日本国大使館附属モスクワ日本人学校　教諭
福島県白河市立白河第一小学校　教諭　佐　賀　要　亮

キーワード：在外教育施設、ロシア、現地校、現地教育理解、異文化交流

１．はじめに

今回の在外教育施設への派遣が決まる前までは、海外へ行ったこともあまりなく、現地の人たちがどのような生活を過ごしているかなど、なかなかイメージがつかなかった。特に、今回の派遣先がロシアということもあり、ほとんどの情報がなく、むしろ悪いイメージの方が先行していた。ところが、実際に生活していくとイメージと全く違い、やさしいロシアの人々やきれいな環境など、実際に触れてみないとわからないことがたくさんあった。そして、日本人学校に勤務するようになって、学校行事や交流などで日本では体験できないような経験をすることができた。その中でも、諸外国の学校との交流やロシアの文化に触れる機会に興味を持って教育に取り組んできた。これらの活動を通して子どもたちにどのような影響を与えていくか、また、日本の子どもたちとの違いは何か、を調べたくこの主題を設定した。

２．現地校について

(1) 現地校の実際

ロシアにもたくさんの学校がある。公立の学校や私立の学校、インターナショナルや日本人学校のような海外教育施設の学校と様々である。特に公立の学校は、「1 番校」というように数字で学校名を表記し、小学生から中学生までが 1 つの校舎で学習活動を行っている。校舎は、「ロの字」型の校舎が多く、日本の学校とは少し違っている。しかし、校舎内は日本の学校とよく似ていて、各学年の教室の他に特別教室などが配置してあった。他にも全校生徒が食事を取るための食堂もあり、そこで生徒たちが朝食や昼食をとることになっている。教員は、1 つの学校で採用されると、希望が無い限りその学校専属の教師として働き、異動はない。そして、女性教員の割合が高く、男性教員の数が少ないのが印象的だった。また、基本的な学習カリキュラムは、どこの学校でも同じ内容で行っているが、それぞれの学校で独自のカリキュラムを作成して学習活動を行っているらしい。そして、言語学習で母国語のロシア語のほかに、第一外国語として英語を学習する学校がほとんどであるが、第二外国語としてフランス語やドイツ語など各学校の特色を活かした言語を選択して取り組んでいる。その中でも、日本語を第二外国語として学習している学校があり、その学校とモスクワ日本人学校で交流学習を毎年行ってきている。赴任 1 年目は 1239 番校という学校との交流を行い、2 年目からは 1471 番校との交流を行った。これらの学校は、日本語を話せる先生が在籍しており、日本語教育にも熱心に取り組んでいる学校であった。

(2) 現地校訪問

①赴任１年目

1239 番校への訪問では、5 年生担任として訪問した。クリスマスが近かったため、クリスマスにちなんだ装飾づくりを行った。飾り付けは、折り紙のようなものを折りたたんでいき、花のような模様を作り、それを貼り付けていくというものだった。その後、ロシアの一般的な遊びとして行われているものを紹介してもらい、現地校の子どもたちと一緒に楽しく遊ぶことができた。

②赴任２年目

1471 番校への訪問 1 年目は、2 年生担任として訪問した。まず様々な動物が書かれた絵に色ぬりを行った。この学校では、日本語の学習を選択できる学年が 5 年生からとなっており、訪問した学年は 3 年生のクラスで

あったため、ほとんどの子が日本語を話すことができなかった。それでも、日本人学校に在籍しているロシア語の話せる子を通したり、身振り手振りをしたりして教えるなど、積極的に関わろうとする姿勢があり、日本人学校の子どもたちも少しずつ打ち解けることができていた。絵が完成すると、それを頭に飾りづけ、ロシアの童話に合わせて歌を歌ったり、鳴き声を真似したりして全員で発表をした。その後、食堂へ移動し、現地の子どもたちが食べているものと同じメニューの食事を食べた。移動する際には、進んで手を繋いでくる現地校の子もいて、すっかり打ち解けている様子も見られた。食べ始めた時間は11時頃であったが、これが朝ごはんとなるらしい。今回は、カーシャと呼ばれるおかゆに似たものや甘いお茶などを食べた。

③赴任３年目

1471番校２年目は、４年生担任として訪問した。今回はロシアの伝統的な衣装が書かれた紙に色ぬりを行った。色を塗る際には、服の色にはそれぞれ意味が込められていることを説明してくれた。また、実際にその衣装を現地校の子どもや先生が着てくれていて、実際にどのような服かを見ながら作業することができた。次に、靴や服などが書かれた紙をそれぞれのグループごとに配り、それに色ぬりをして一つの作品になるように組み合わせていく活動を行った。この頃になると、現地校の子どもたちの日本人学校の子に日本語を教えてもらいながら少しずつ単語を話せるようになっている子もいた。食堂でのご飯の後、次は中学生（８年生）によるロシアと日本に関するプレゼンテーションを行った。日本語を学習している学年ということもあり、説明は全て日本語で行っていた。スムーズではなかったが、十分聞き取れるくらいのスピーチだった。時折クイズなどを織り交ぜた発表になっており、子どもたちも楽しく聞くことができた。最後にこの学校で、毎朝全校生徒で踊っているというダンスを一緒に踊った。

(3) 現地校来校

現地校が来校する際には、日本文化の紹介というテーマで行った。

①赴任１年目

1239番校が来校した際には、日本の食文化の紹介ということで、「米」の紹介を行った。まず、米に関する日本での稲作の様子などを、動画を用いて紹介した。その後、社会科で稲作の学習をする際に行った米の普及を呼びかける活動の一環として考えたキャラクター作りを現地の子どもたちと一緒に考えた。ロシアでも米は食べられてはいるが、日本ほど馴染みはないらしく興味深そうに活動していた。日本人学校の子どもが考えたものと違い、ロシアの文化を用いた作品がたくさん考えられ、面白い作品ができた。次に、実際に米を使った料理ということで、おにぎり作り体験をした。ロシアでも良く食べられる鮭を具にし、現地校の子に握らせた。米を握るという体験は初めてという子がほとんどで、普段食べるよりも美味しいと言ってくれる子もいた。

②赴任２年目

1471番校の来校１年目は、２年生の生活科で作った動くおもちゃを用いて交流を行った。初めは自己紹介を学習しているロシア語で行ったり、グループ作りゲームなどの簡単なゲームをしたりして交流した。誕生月が同じ子で集まったり、好きな果物が同じ子で集まったりする際に、「こんにちは」や「私の名前は○○です」という簡単な自己紹介をその都度させるようにした。ロシア語の学習でも何度か練習していたこともあり、上手に話すことができていた。その後、子どもたちが自分たちで作ったおもちゃをワークショップ形式に準備し、そこへ現地校の子を招待する形で行った。車やぺったんカエル、金魚すくい、けん玉など様々な遊びを用意したが、どれも現地校の子にとっては新鮮だったようだった。時間を十分確保したこともあり、はじめはなかなか進んでゲームに行くことができなかった子も、後半には自分から進んで体験することができていた。また、記念になるものを渡したいという子どもからの提案もあり、それぞれのグループごとに折り紙や賞状などの賞品を用意するようにし、現地校の子どもたちも喜んで持ち帰っていた。

③赴任３年目

1471番校との交流２年目は、子どもたちがやりたいと考えたゲームと書写の学習を行った。初めのゲーム

は、体育館で昨年度と同様に、笛を吹いた数だけ人数を集めたり、同じ誕生月の子を集めたりするゲームを行った。ゲームを通して、できるだけかかわる機会を設けた。今年度は、それに加えてそれぞれの学校ごとに相手の子の名前を覚えるゲームをした。日本人学校の子どもたちは、ロシア人の名前に触れる機会が多いこともあり、ほとんどの子の名前を覚えることができた。しかし、聞きなれない日本人の名前は難しかったようで、現地校の子どもたちはあまり覚えられなかった。また、子どもたちがやりたいといった爆弾ゲームを行った。音楽を流している間にボールをとなりの子へ渡し、音楽が止まった時にボールを持っていた子が自分のことを1つ紹介するというゲームだった。日本人学校の子と現地校の子が隣り合うようにさせたこともあり、ボールを渡す際に声をかけるなどのコミュニケーションをとることができた。その後、教室に場所を変えて書写を行った。現地校の子が座り、日本人学校の子が隣に立って教えるというスタイルで行った。初めに注意点を教師から説明し、それから練習用紙になぞり書きをさせた後に清書をさせるようにした。筆遣いなどを実際に書いたり、一緒に書いてあげたりすることで上手に書けるようになっていた。清書で書いた文字は、いつまでも仲間でいられるようにと子どもたちで考えた「仲」という文字を書いた。書き上げた作品は、台紙に張って記念品として持ち帰るようにし、それを現地校の子も喜んでいた。

3．同居校について

(1) 同居校との交流

モスクワ日本人学校の校舎には、日本人学校以外に3つの国の在外教育施設があり、1階にフィンランド校、2階にスウェーデン校、3階にイタリア校、4階と5階に日本人学校というように分かれて使用している。校舎だけでなく、校舎内にある体育館や校庭も共有しているため、使用できる時間を割り振っており、いくつかの使用制限がある。そのような環境であるため、普段の生活の中でお互いの学校と関わることが少なく、あいさつをする程度となっている。そのため、それぞれの学校の行事などを通してもっとかかわる機会を設定しようということで、声を掛け合いながら交流を行ってきている。

自分が在籍していた3年間では、ルチア祭と呼ばれるフィンランドの伝統的なお祭りの行事に参加したり、音楽フェスティバルのようなイタリア校の発表に参加したりする文化的な行事があった。特にイタリア校の音楽フェスティバルでは、日本の音楽を見せてほしいという依頼があったため、運動会の表現で発表するために練習していた「よさこい」を披露した。イタリア校は、リコーダーやイタリアの伝統的な楽器と思われる太鼓を使って小学生から高校生までがそれぞれ演奏してくれ、鑑賞させてもらった。また、文化面だけでなく運動面でも交流する場を設け、スポーツ大会のように一緒に体力テストのようなものを行ったり、各校対抗のサッカー大会などのゲームをしたりした。その他にも、日本人学校が主催として行った、イタリア校とのドッジボール交流会では、委員会活動と関連付けながらドッジボールを知らないイタリア校にルール説明のビデオを作るなど、子どもたち主体で行うことでより他校への関心を深めながら行うことができた。これらの交流を行うことによって、子どもたち同士でもすれ違いざまに笑顔であいさつをするようになり、同居校同士の友好関係を気付けたのではないかと思う。

(2) 同居校訪問

教員研修の一環として、同居校への訪問を毎年行っている。教員の中でグループ分けをし、毎年1校ずつ回ることで、派遣期間中に3校すべてを回れるように計画している。それぞれの学校では、日本と違った面が多くみられ、これからの教育活動の参考となるものが多々あった。

①スウェーデン校訪問

参観した学級は、中学生、中学年、低学年と思われる。技術の授業を参観。作業室のような部屋で中学生くらいの生徒が授業をしていた。ドリルを使って木に穴を開ける作業を教師が見本を見せながら指導し、用具なども充実していた。中学年のクラスでは、毎朝行っているスピーチの原稿作りをしていた。スピーチの内容は、

様々な国について調べたことを発表するらしい。その教室には、パソコンがあり、教材をダウンロードして学習しているとのことだった。低学年のクラスでは、家庭科でミシンを使ってぬいぐるみ作りをしていた。ミシンを扱う練習をしてから作成したらしく、何枚かプリントがあった。最後に、幼稚園も参観。子どもはいなかったが、各教室を見て回った。基本的には自由保育だが、昼寝と読書は必ずあり、ロシア語や英語の学習も週に１回組まれているとのことだった。

②フィンランド校訪問

まず、小学部低学年の授業を参観した。フィンランド語の授業で、１年生と２年生が同じ教室で行っていた。初め１年生の方に教師がつき、読み方を一緒に行った後、プリント学習になった。その間、教師は２年生の読み方を確認していた。日本の複式学級のわたりと同様の動きをしているのが印象的だった。次に、小学部高学年の授業を参観した。少人数ということもあるのか、グループ机にしており、すぐに話し合えるようになっていた。テキストは、１冊の教科書が色事に分けられており、テキスト、エクストラ、ホームワークと分けられていた。授業は、個人のペースに合わせて進められており、それぞれがテキストを進めていく形式で行っていた。わからないところがあると、友だちに聞いたり、教師を呼んだりというスタイルで進めていた。

③イタリア校訪問

まず小学校６年生10名の算数授業を参観。授業形態は一斉指導型。関数でグラフを作成する授業であった。式を求め、生徒にグラフを書かせていた。中１の社会は歴史で４、５人の生徒による一斉授業。中３のクラスは、ロシア語の授業を参観。５名のクラスで、教師はロシア語を話し、生徒もロシア語で答えていた。文法学習で生徒に質問し、発表させていた。続いて小学校３年生の宗教学の授業を参観。テキストを使用しての一斉授業であった。創世記と科学との関連であった。挿絵には、イタリアらしく有名な画家による宗教画が多々掲載されていた。少人数のクラスが多く、教師が一人ひとりに問いかけ、授業を進めていた。生徒の発言の機会が多いと感じるクラスもあったが、教師が話し生徒が聞くといった授業もあった。プロジェクターが備え付けられている教室もあり、ホワイトボードに映しいつでも使える環境であった。

４．おわりに

今回の派遣を通して、日本では体験できないことをたくさん経験させてもらった。特に、外国の文化に触れる機会は日本で体験することは難しく、日本で指導する際にも自分の経験のない知識のみの指導となってしまっていた。だから、これらの経験したことは、実体験として日本の子どもたちへと還元していけると思う。世界には日本とは違う考え方を持った人たちがたくさんいること、そのような人たちのことをどう理解し、どのように付き合っていくかなど、これからのグローバル社会で活躍していく子どもたちに考えさせていきたいと思う。また、交流を通して、外国の子どもたちと関われたことはとても楽しかった。言語が通じない時でも、積極的に話しかけたり、身振り手振りで伝えようとしたりする姿が日本の子どもたちにはあまり見られない光景だと感じた。日本の子どもたちに今必要と感じる自分の意思を相手に伝えようとする意志が、外国の子どもたちは持っていると思う。実際、日本人学校の子どもたちも初めはなかなか自分から関わろうとする姿勢が見られなかった。しかし、積極的に関わろうとする外国の子どもたちと出会うことで、回数を重ねるごとに自分から何かを伝えようとする姿が見られるようになってきた。実際に体験することの大切さを感じた。日本の学校でも、このような機会がもっと増えればと思う。逆に、相手校から日本の学校のいいところなどもたくさん聞くことができた。授業を受ける態度や普段の生活の様子、考え方など外国の子どもにはないものをたくさん持っていると言われた。これらのことは、日本が世界に自慢できる非常に素晴らしい習慣であると感じるとともに、これからもこの習慣を続けていくことが大切だとも感じた。